

日本の左翼と右翼の源流

岡崎正道

序

1970年11月25日、作家三島由紀夫（1925-70）は「楯の会」の同志とともに東京市ヶ谷の陸上自衛隊東部方面総監部に乱入、広場に集まった自衛隊員に向かいバルコニーから「檄」を飛ばす演説を行なった後、総監室内で「楯の会」会員森田必勝の介錯のもと割腹自殺を敢行した。その「檄文」に曰く

われわれは戦後の日本が経済的繁栄にうつつを抜かし、国の大本を忘れ、国民精神を失ひ、本を正さずして末に走り、その場しのぎと偽善に陥り、自らの魂の空白状態へ落ち込んでゆくのを見た。政治は矛盾の糊塗、自己の保身、権力慾、偽善にのみ捧げられ、国家百年の大計は外国に委ね、敗戦の汚辱は払拭されずにただごまかされ、日本人自らの歴史と伝統を汚してゆくのを、齒噛みをしながら見てゐなければならなかった。われわれは今や自衛隊にのみ、真の日本、真の日本人、真の武士の魂が残されてゐるのを夢みた。

敗戦後の「ヤルタ・ポツダム体制」により民族精神を去勢され、自衛隊は米国の傭兵になり下がり、国家の根本義たる防衛問題がご都合主義的法解釈によってごまかされ、それが日本人の魂の腐敗、道義の退廃の根本要因となっていると、三島は満腔の憤激をこめて主張した。「建軍の本義とは、天皇を中心とする日本の歴史・文化・伝統を守ることにしか存在しない」とも喝破した。

平和と民主主義を謳歌する“昭和元祿”の時世に突然の雷鳴の如き衝撃を

与えたこの三島事件は、「三島は気が狂ったとしか考えられぬ」（佐藤栄作首相）、「気違いはどこにでもいるものだよ」（大内兵衛元東大教授）というように、あくまで発狂者の常軌を逸した凶行と捉える論調が大勢であった。その政治的意味についても、大かたは狂信的右翼思想の発露と認識されたように思う。

他方三島は死の前年、1969年5月13日に東大で開催された「全共闘と三島由紀夫の公開討論会」に出席、全共闘活動家の芥正彦・小阪修平らと国家や天皇等をめぐっての激論を展開している。その中で三島は、「諸君らが戦後日本の欺瞞と対決しようとしている姿勢に共鳴する。君たちがただ一言“天皇万歳”と言ってくれたら、私は一緒に闘って死ねる」と発言した。当時「新左翼」と呼ばれ、社会党・共産党などの旧左翼を超えるラディカリズムを行動の核心としていた全共闘運動に対する三島のシンパシー濃厚なスタンスを見れば、左翼＝進歩革新、右翼＝保守反動などといった単純な図式的規定はあまり意味をなさないことが明らかとなる。

本論考では、日本の左翼・右翼という概念が明治維新以来の近代日本の歴史の展開の中でどのように形作られていったのかをそれぞれ左右両翼の祖と言われる中江兆民（1847-1901）・頭山満（1855-1944）という二人の人物、および彼らに連なる諸群像を軸に考察してみたい。

1.

広辞苑によれば、左翼・右翼の定義は次の通りである。

左翼・・・（フランス革命後、議会で議長席から見て左方の席を急進派ジャコバン党が占めたことから）急進派・社会主義・共産主義などの立場。

右翼・・・（フランス革命後、議会で議長席から見て右方の席を占めたことから）保守派。また、国粹主義・ファシズムなどの立場。

フランス革命は近代革命の典型とみなされ、その中で進歩派・保守派の政

治的立場に立ったものがそれぞれ左翼・右翼と呼ばれたわけであるが、その後の歴史の推移の過程で社会主義・共産主義を左翼（進歩派）、国粋主義・国家主義・ファシズム等の思想を右翼（保守派・反動派）と規定するのは、多分にマルクス主義革命論に判断基準を置いた、相当に偏見を伴う立論であろうと思う。原始共産制→古代奴隸制→中世封建制→近代資本制という生産様式の変転を人類の歴史の直線的発展と見、資本主義社会における「賃金奴隸」たる労働者階級の決起とこれを領導する前衛党（共産党）によって遂行される社会主義革命、そしてその果てに、生産手段の社会的所有に立脚し「各成員がその能力に応じて労働し、必要に応じて分配を受けることが可能となる」、人類の前史の終極としての共産主義が実現されると説く「科学的社會主義」の原理からすれば、なるほどその史的展開のベクトルにおいて正方向に位置する社会主義・共産主義の理論は紛うかたなき進歩（左翼）であり、逆にその方向に抵抗（敵対）する思想は憎悪すべき復古・保守反動（右翼）との謗りを免れない仕儀となるであろう。

だが、近年のベルリンの壁崩壊とソ連邦の解体、各国の共産党支配体制の終焉、中国等共産党独裁国家における資本主義的市場経済制度の導入といった世界の現実、否応なく上記の如き単線的シェーマの錯誤を如実に物語っていると云えるのではないか。

日本共産党は「アジアには、“市場経済を通じて社会主義へ”という前人未到の道を進む国、20余年で貧困人口を4億人減らした国がある」として中国の「社会主義市場経済」を高く評価している（2007年パンフレット「日本共産党はこんな政党です」）が、そこでは、かつての人民公社に典型的な経済平等主義を脱し、小平の「先富論」に象徴される資本主義的競争原理の積極的推進によってはじめて中国の経済成長が実現—このことはある意味で「資本主義に対する社会主義の敗北」と認定せざるを得ぬ—したという冷徹なる事実と、その反面において日本に数倍するとも言われる凄まじい経済格差や無惨なまでの環境破壊（これらはまさしく、資本主義の利益追求至上主義がもたらす負価にほかならない）がもたらされているといった現実が、意図的にかあるいは極度のオプティミズムゆえにか語られていない。アジア

の成長株とも評されるベトナムもまた、けだし大同小異であろう。

1990年代次々に共産党政権を倒滅し、第二次大戦後のソ連共産党による支配を脱して自由主義陣営に復帰した東欧諸国の動きや、先記の中国・ベトナム等の変化は、マルクス主義革命論のテーゼに照らせば果たして進歩なのか、それとも退歩・反動なのか、どうにも容易に説明が付けられないであろう。仮に日本共産党のように反日共系極左集団を「エセ左翼」「暴力集団」等々と唾罵し、ソ連や東欧の共産国家の崩落に「にせ物の社会主義・共産主義国家の没落はもろ手を挙げて歓迎」などと、遁辞もしくは負け惜しみにも似た論評を下そうとも、その日共自体が戦前コミンテルン日本支部として結成（1922年）されてモスクワからの指令によって動かされ、また戦後もルーマニアのチャウシェスク独裁政権などと友好関係を取り結んだという歴史事実を覆い隠すことはできないであろう。

別に日本共産党（あるいは社会主義・共産主義イデオロギーそのもの）を批判することが本稿の主旨ではないので、話を本筋に戻したい。

2.

幕末の動乱は、アメリカ東洋艦隊司令長官ペリーに率いられた4隻の黒船が神奈川沖に出現した時から始まる。強大な西洋の軍事的脅威を眼前にして、徳川幕府はそれまでの専制的政治支配の継続に対する確信をやや減退させた。諸大名はもとより低身分の幕臣や陪臣にまで対外政策に関する意見を求め、和親条約から通商条約の締結に至る過程で、国策決定の独占権を次第に喪失していった。朝廷に対し条約の勅許を奏請したことはその端的な表れであり、結果として下級武士・草莽層にまで政治発言を許す情勢を生み出してしまふ。処士横議の風潮を力づくで抑圧した大老井伊直弼（1815-60）の安政大獄は、桜田門外の変を惹起し、幕府の求心力に著しい陰りをもたらすこととなった。

その後の攘夷派と公武合体派の確執→武力討幕論の台頭→大政奉還と王

政復古→戊辰戦争と維新政権の樹立という幕末の政治展開については、紙数の制約もあるゆえ詳述しないが、1868年の明治政府成立に至る抗争の過程に、早くも左右両翼の思想的萌芽が見出せるようにも思われる。

長州藩尊王攘夷派の泰斗とも言うべき吉田松陰（1830-59）は松下村塾において多くの青年を教育、高杉晋作（1839-67）久坂玄瑞（1840-64）・吉田稔麿（1841-64）・入江九一（1837-64）・前原一誠（1834-76）・伊藤博文（1841-1909）・山県有朋（1838-1922）・山田顕義（1844-92）・品川弥二郎（1843-1900）等々、幕末期の討幕運動の活動家から明治国家の指導者まで実に多彩な人士を育て上げたが、松陰の思想をつぶさに考察すると、そこには後の両翼の発想につながるような特質が見えてくる。

天皇の尊厳を至上化・神聖化してこれを全国民の精神的帰一、忠順の対象たらしめようとする発意は、まさしく一君万民論として右翼精神の根基をなすと言うべきものである。しかし同時に松陰は、半農半士の生活体験にも裏打ちされた勤労礼賛の意識、社会を底辺で支える農民層に向けた強烈なシンパシーをも内面に有していた。反封建闘争たる農民一揆に対する彼の深い理解と共感、また被差別賤民層にさえ向けた情愛は、後年の左翼思想の走りかとさえ思わせるものがある。

尊王即ち天皇・朝廷に対する尊崇の念を表明したからと言って、それを直ちに右翼精神の発露であるなどと決めつけるのは甚だ早計である。当時の「尊王」とは、あたかも戦後日本における「民主主義」と同様の時代の常識、誰しも否定し得ぬ社会通念だったからである。あくまで、その内実をこそ問わねばならない。

松陰の刑死後、彼の遺志を継受した長州尊攘派などの捨身的躬行により、時勢は回天＝倒幕革命へと突き進んでいくが、薩摩・長州等の反幕勢力を結集させる上で多大な役割を果たした人物に坂本竜馬（1835-67）がいる。熊本の儒教的理想主義者横井小楠（1809-69）や遠望闊達な幕臣勝海舟（1823-99）らの薫陶も受けた竜馬は、尊王至上主義のドグマ的思考からは相当に自由な発想の保有者であった。幕末版“悪徳のすすめ”とも言うべき『英将秘訣』は著者不明の奇書であるが、かつては坂本竜馬の著と見られて

いた。その文中に言う。

万国に生まれしか、或は外国へ渡らば、王になるを以て心とすべし。日本にては開闢より天子は殺さぬ例なれば、是ればかりは生きて置くべし。

天下万民を救ふといふ名あれば、恥る所なしと定めて事にかかるべし。不遜の言辞を並べた本書が竜馬の作とされていたのは、彼が尊王や攘夷というような時代精神の呪縛からかなりの程度抜け出ていたがゆえにほかならない。「万国公法」をもって新時代の最良の武器となし、海援隊を世界に雄飛させんと企図するなど、天馬空を行く竜馬の意識と行動は確かに余人の意表をつき、時代の最先端をゆくものであった。

政治形態についても、幕府倒壊後の新国家構想を「船中八策」にまとめ、来るべき新政権に徳川慶喜（1837-1913）を議長として据え、やがては庶民の代表まで加えた議院において国の政策を論議するという、議会政治のプランをさえ抱懐していた。自由民権思想の草分けとも言うべきこの人物に、後の民権論のイデオログ中江兆民が啓発を受けたというのは、決して偶然ではない。

3.

中江篤介（後の兆民）は1847年、高知城下にて土佐藩の足軽の子として誕生した。生涯奇行をもって知られた兆民は、幼児期より食事の後に茶碗などを叩き壊して快哉をあげるという奇癖の持ち主であったが、幕末動乱真っ只中の1865年秋、藩命により長崎に赴きフランス語の修学に努めることとなった。当時長崎では坂本竜馬が海運・交易を業とする亀山社中（海援隊の前身）を営んでいたが、中江はここで竜馬と出会う。幸徳秋水著『兆民先生』に、中江の懐旧談が載っている。

予は当時少年なりしも、彼を見て何となくエラキ人なりと信ぜるが故に、平生人に屈せざるの予も、彼が純然たる土佐訛りの言語もて、「中江のニイさん、煙草を買ふて来てオーセ」などと命ぜらるれば、快然として使ひせしこと屢々なりき。

まだ若年だった兆民が長崎で坂本竜馬の思想的影響を直接受けたかどうかは定かでないが、少なくとも鎖国期の唯一の海外への窓であったこの地において、新時代を先取りする試みを進める竜馬から、彼がなにがしかの示唆、その
先進的な活動の息吹きのようなものを感じたであろうことは想像にかたくな

さて兆民は新政府発足の後大久保利通（1830-78）の知遇を得、1871年岩倉具視（1825-83）・大久保・木戸孝允（1833-77）らの欧米使節団に同行を許されてフランス留学へ出発した。フランス滞在は2年半に及んだが、彼はこの地で政治・哲学・歴史・文学等を学び、またパリコミュンンの鎮定→第三共和制移行という時代の変転の中で、王党派・共和派・帝政派など諸派が角逐する政界絵図をも実見することができた。帰国後、留学中に親交を結んだ西園寺公望（1849-1940）と組んで『東洋自由新聞』を発行、大いに健筆をふるうが、兆民の旺盛な政論執筆はルソーの『社会契約論』を翻訳し、特有の人民主権論を展開するに至る。この点でも、“東洋のルソー”と評された兆民は、まさしく日本における左翼の嚆矢とみなすことができるであろう。

征韓論争に敗れて下野した西郷隆盛（1827-77）が桐野利秋（1838-77）ら門弟に担がれて明治政府打倒の戦い（西南戦争）に決起し、勇戦空しく城山の露と消えたのは1877年の秋である。兆民は熊本出身の友人で「泣いて読む、ルソーの民約論」と詩に詠じた宮崎八郎（1851-77）が西郷軍に参加しているのを案じ、田原坂の激戦の後、熊本に宮崎を訪ねた。

「西郷が民権論者にあらざること明白。しかるに何ゆえ民権主義者の君が西郷軍に身を投ずるや」と問うた兆民に対し、宮崎は「それは百も承知だが、まず西郷に協力して明治政府を倒し、然る後今度は西郷に主義のいくさを挑み、西郷政権に対し謀反を起こす」と快活に答えたという。そして説得をあきらめて兆民が去った数日後に、宮崎は戦死した。

維新革命の英傑大西郷の威望と薩摩士族の剛勇をもってしても、農民出身者が大半を占める徴兵軍に勝利し得なかったという厳然たる事実は、中央政

府に対する軍事的抵抗が早不可能、武力による第二維新などは白日の夢にすぎないことを天下に知らしめた。1874年民選議院設立建白書提出の際西郷に同調を促して断られた板垣退助(1837-1919)は、(戊辰戦争時の東征軍司令官という華々しき軍歴にもかかわらず)武闘路線にはとうに見切りをつけ、言論戦による政府攻撃を主眼とするようになっていた。74年板垣は故郷の高知で立志社を設立、翌年全国有志の政治結社・愛国社へと発展させて自由民権運動の火の手を上げた。西郷敗死後の80年には国会期成同盟を組織し、総代河野広中(1849-1923)・片岡健吉(1843-1903)が国会開設請願書を政府に提出、81年には日本初の本格的政党である自由党を結成して、板垣自ら総理に就任する。

兆民は民権運動の理論的指導者として自由党結成準備の会議には出席したが、あえて入党はしなかった。政府の厳しい弾圧で創刊1ヶ月にして『東洋自由新聞』廃刊に追い込まれるような状況の下、洋々たるスタートを切ったかに見えた自由党も、板垣の同志後藤象二郎(1838-97)の無定見な行動などによって迷走を余儀なくされた。82年4月6日の板垣遭難事件、“板垣死すとも自由は死せず”の名文句で世の喝采を浴びる場面などはあったものの、その後の反政府活動のエスカレート、福島事件・加波山事件・秩父事件等いわゆる「自由党激化事件」のさなかに、板垣・後藤の両首脳が伊藤らの調略に乗せられるごとく政府の資金で外遊するという背信行為がなされ、自由党の先行きには暗雲が立ち込めることとなった。兆民は、そうした板垣・後藤ら指導部の限界を見通していたかの感がある。

自由民権運動は、倒幕-明治維新を真のブルジョア民主革命へと発展・昇華せしめるための、日本人民の偉大な闘いであった。不平士族の生き残りたちを中心とする「士族民権」から出発した民権運動は、やがて豪農層の経済闘争、さらには負債と重税に苦しむ貧農層まで巻き込む世直し蜂起の傾向さえ示すようになっていく。兆民は「激化事件」の蹉跌等によって自由党の運動が一時頓挫しかけた1887年の5月、主著『三酔人経綸問答』を発表した。

日本の近代政治思想史上に名高いこの著作において、彼は後進的近代化の

途上にある小国日本の自立・発展を図るための三つの国家戦略を、三人の人物に語らせるという筆法を採って、国民の政治意識の覚醒－立憲政体の確立を強説した。まず民主共和制と平和の功用を説く「洋学紳士」が、自由・平等・博愛という理想の実現を求め、軍備撤廃・非戦中立の論を展開する。一方東洋「豪傑君」はかかる非武装平和論を学士の空理空論と笑殺し、日本の国運進展のためには強固な君主制の下軍備を拡充し、大陸侵攻を積極的に進めて領土を拡張しもってアジアに覇を唱えるべきであると主張する。この両者の間に立った「南海先生」は、「紳士君の説は未来の理想、豪傑君の主張は過去の英傑の夢、ともに直ちには採るべからず」として、漸進中道の現実主義、即ち防衛主体の国民軍を擁しての平和独立外交と封建制を脱して漸次立憲制を整えることの重要性を強調する。

「洋学紳士」はその後の対露非戦論から社会主義革命論と反戦論、明治末期の「平民社」から大正・昭和前期の無産労働運動と平和主義外交の主張を先取り、ひいては戦後の社会党「非武装中立論」までも包摂したような左翼リベラルのイデオロギーの体現者の感がある。対して「豪傑君」の所説は、日清・日露以降の帝国日本の軍備拡大、大陸唱覇と朝鮮・台湾領有という右翼・軍国主義の超タカ派路線の祖型、満州武力占領と対中全面戦争を予言し、対米英宣戦と8・15の破局にまで至る軍事投機の悲劇的結末を示唆するごとくである。そして「南海先生」の穏健な現実主義は、伊藤博文・西園寺公望・原敬（1856-1921）と続く政友会や加藤高明（1860-1926）・浜口雄幸（1870-1931）・若槻礼次郎（1866-1949）ら憲政会・民政党の諸政権、幣原喜重郎（1872-1951）らの国際協調外交という、明治末～昭和初期の日本の実際の政治を暗示するものであると言える。

ところで中江兆民自身の姿はこの三者のいずれに投影されているのかということについては、ある意味で三者とも兆民の分身であるが、思想的には「洋学紳士」が彼の最も理想とするところであったらうというのが通説である。

4.

自由民権運動の急進化を恐れる伊藤博文ら政府指導部は諸治安立法で彼らの行動を規制する一方、ドイツ（プロイセン帝国）の政体に倣いながら、民権派を出し抜く形で内閣制度（1885年）・大日本帝国憲法の発布（1889年）・帝国議会の開設（1890年）と、立憲政治の体制を整えていった。

兆民は、上から国民に与え施される「恩賜的民権」ではなく国民自らの下からの力で勝ち取る「恢復的民権」こそが望ましいと言いつつ、たとえ恩賜的な民権と雖もこれを巧みに利用し内容を充実させていくことによって、国民の権利の拡充は可能になると説いた。兆民は単なる書齋・講壇の理論家ではなく、制約ある現実政治の中でいかに民権の実を上げるかを考慮して行動に移す実践的活動家であった。1887年政府の弾圧に慥伏を強いられていた民権派が団結し、言論集会の自由・地租の軽減・外交の回復（不平等条約の改正）という三大綱領を掲げて伊藤内閣への反撃を試みた三大事件建白運動において、兆民はこの統一戦線の闘争を民主主義の徹底化を求める立場から指導した。しかし全国的に高揚したこの反政府運動も、結局は保安条例の制定による圧迫で終息を余儀なくされた。

その後兆民は1890年の第一回総選挙に大阪から出馬片岡健吉・中島信行（1846-99）・大江卓（1847-1921）・植木枝盛（1857-92）・林有造（1842-1921）ら土佐民権派の同志とともに当選して代議士となった。ところが通常議会開会2か月余の91年2月民権派を中心とする民党（野党）が、議会で圧倒的多数を占めているにもかかわらず、歳出（軍事費）削減・減税の問題で政府による民党切り崩し工作の片棒を担いだ板垣・後藤らに乘せられて29名の議員が政府に同調、ために野党は分裂し政府案が成立してしまうという事態が起こる。かつて私擬憲法「日本国国憲案」を発表し、ラディカルな人民主権・反政府抵抗権をさえ主張していた植木枝盛までも含む「土佐派の裏切り」に兆民は激怒、『立憲自由新聞』に「無血虫の陳列場」な

る抗議の一文を発表して、決然として議員を辞職した。

兆民が去って後、議会から民権運動の情熱と熱気は次第に消えうせて、伊藤から政府首脳との駆け引きが目立つようになる。1898年6月大隈重信(1838-1922)と板垣退助が手を結び、長年反目し合ってきた自由党と改進黨(当時は進歩党と改称)を合体させて憲政党を組織、大隈が首相、板垣が内相となる「隈板内閣」が成立したが、実はこの政治劇の仕掛け人は他ならぬ伊藤博文であり、大隈・板垣は伊藤の政治的思惑に利用されたにすぎなかった。しかもこの内閣も尾崎行雄(1859-1954)文相の「共和演説」をきっかけに旧自由党と旧進歩党の対立が激化して崩壊、日本初の政党内閣も僅か4ヶ月のはかなき幕切れとなる。

1900年9月伊藤博文を初代総裁とする立憲政友会が創立、憲政党は解党してこれに合流し、輝ける自由民権運動はここに名実ともに消滅した。政界引退後一時北海道で事業などを手掛けたが成功せず、静居していた中江兆民は政友会誕生のニュースを聞いて憤激、弟子の幸徳秋水(1871-1911)に「自由党を祭る文」を執筆させた。

歳は庚子に在り八月某夜、金風逝瀝として露白く天高きの時、一星忽焉として墜ちて声あり。嗚呼自由党死す矣。而して其光榮ある歴史は全く抹殺されぬ。(『萬朝報』)

1901年、兆民は喉頭癌のため余命1年有余と宣告される。そして「一年有半」「統一年有半」を著し、54年の波乱の生涯に幕を下ろした。

土佐出身のジャーナリスト黒岩涙香(1862-1920)は後年、郷土の先達中江兆民を評して「操守ある理想家」と述べたが、確かに兆民の思想には人民の権利の拡張・軍備の縮減・中立外交の提唱など、戦後日本の諸政策、日本国憲法の理念にさえ通ずる理想主義的性格が濃厚であった。被差別部落の問題にも強い関心と義憤を抱き、総選挙には故郷の高知ではなくあえて部落民の多く居住する大阪の選挙区から出馬したほどである。彼の政治的信条と理念は、弟子の幸徳秋水(*本名は幸徳伝次郎、「秋水」の号は元々兆民が使っていたのを譲られた)や堺利彦(1870-1933)らを通じて明治末期以降の社会主義者、左翼の活動家たちに継受されていったと言えるであろう。

しかしこの兆民が一方において、日本の右翼の元祖と目される頭山満と実は肝胆相照らす親交を有していたという事実を忘れてはならない。

5.

死期の迫った中江兆民が最後の力を振り絞って執筆した『統一年有半』の中に、頭山満についての記述がある。

頭山満君、大人長者の風有り、かつ今の世、古の武士道を存して全き者は、ひとり君あるのみ、君言わずして而して知れり、けだし機智を朴实に寓する者と言うべし。

まさに下にも置かぬ激賞ぶりである。一方頭山もまた、いろいろなところで兆民を高く評価する言を残している。では、この頭山満とは一体いかなる人物であろうか。

頭山満は1855年4月、筑前藩士筒井亀策の三男として出生、幼名乙次郎。母方の頭山家に入り、満と改名。平野国臣（1828-64）ら福岡勤皇派の流れをくむ女傑高場乱（1832-91）—平野や高杉晋作等の志士を支援した幕末の女流勤王歌人の野村望東尼（1806-67）の従妹—が開設した興志塾に16歳の時入門して、進藤喜平太（1850-1925）・箱田六輔（1850-85）など後の同志となる男達と出会い、天下国家の大事に挺身する志を錬磨した。1875年進藤・箱田らと矯志社を結成、折柄勃発した萩の乱・秋月の乱に呼応すべく福岡で武装蜂起を画策したが果たさず、下獄。77年の西南戦争には獄中であって参加できず—矯志社の同志武部小四郎（1846-77）は参戦して刑死—、敬愛する西郷に殉ずることが叶わなかった。西郷敗死後、出獄した頭山は高知に赴いて板垣退助に決起を促したが、逆に板垣から自由民権の大義を説諭され、福岡に帰って民権結社「向陽社」を旗揚げする。この向陽社の後身として1881年（1879年説も）に創設されたのが、名高い玄洋社である。

明治前期から太平洋戦争敗戦に至るまで大アジア主義掲げる代表的国家

主義団体として存続し、日本の大陸侵攻政策にも少なからぬ影響力を行使するとともに、幾多の右翼活動家を輩出－内田良平（1874－1937）・杉山茂丸（1864－1935）ら幹部のほか、広田弘毅（1878－1948）・中野正剛（1886－1943）・緒方竹虎（1888－1956）・安川第五郎（1886－1976）といった政治家・実業家も一時在籍－してきた玄洋社も、出発点は自由民権運動だったのである。同社の基本精神を定めた「憲則三条」には、「第一条 皇室を敬戴すべし」「第二条 本国を愛重すべし」「第三条 人民の権利を固守すべし」と掲げられているが、これらは民権運動結社のテーゼとして格別に特異なものではない。

自由民権は幕末の尊王討幕、明治初期の士族叛乱の精神を引き継ぐ反体制的政治運動である。ここから日本の左翼・右翼という両極のイデオロギーが生み出されていくわけだが、その両翼の思想的分岐点はどこにあったと言えるであろうか。

玄洋社は初代社長の平岡浩太郎（1851－1906）から箱田六輔、次いで進藤喜平太と受け継がれていくが、実際の領袖は頭山満であったと言ってよいであろう。玄界灘を睨みつつ大陸雄飛に青雲の志を燃え上がらせた頭山の心情においては、民権運動の三大テーマ、①人民の権利・自由の拡大、②経済的負担の軽減、③対外的独立の堅持の中で、③の問題が最重要と認識された。民権政社としてスタートした玄洋社が次第に日本の帝国主義政策の先導的役回りを演ずる傾向を強めていくのは、こうした機微に根ざしている。19世紀中葉以降、露骨なアジア経略を推進しつつある英米仏露等西洋列強の野望。毅然としてこれを撥ねのけ、対外的独立を堅持することは、近代国家日本にとって喫緊の命題である。そしてその重要なメルクマールの一つが、不平等条約の改正であった。

幕末に徳川幕府が欧米諸国との間に締結した通商条約は、治外法権を容認した関税自主権も欠如した日本に不利益な不平等条約であり、これを対等な内容に改定することが、明治日本の最大の外交課題であった。しかるに政府は、2年間も首脳が外遊するという岩倉使節団派遣を行なって成功を得ず、かつそれが征韓論政変を招いて西郷・板垣らの下野－士族叛乱と西郷の横死

という痛恨の犠牲を生み出し、次いで井上馨（1835－1915）の鹿鳴館外交（連日の西洋式舞踏会）なる猿芝居を案出して諸国の失笑を買い、拳句は大隈重信による外国人判事の登用という国辱的施策の導入。これら一連の愚策は、頭山とその同志たちにとって最早許容しがたき事態と映じた。

1889年10月18日条約改正交渉の責任者たる大隈外相は、外務省の門前で玄洋社員来島恒喜（1859－89）の投じた爆裂弾によって右脚切断の重傷を負い、文字通り失脚。犯人の来島はその場で自決したため背後関係は謎のままだが、使喚者が頭山であった可能性も否定できない。かつ来島は、中江兆民の仏学塾の門弟でもあった。ともあれ幕末期の「天誅」を思わせるようなこの政治テロにより、玄洋社は一躍勇名をとどろかすこととなる。

その後、朝鮮をめぐる清国との確執とそれを主因とする日清戦争－ロシアを中心とする列強による三国干渉－対露開戦論の高揚と時勢は展開するが、もとより「対外硬」を基本信条とする頭山と玄洋社は、あくまで強硬論を叫び続けた。

日中戦争時の首相近衛文麿（1891－1945）の父である公爵近衛篤磨（1863－1904）はこの時期貴族院議長の職にあったが、かねてより大アジア主義を標榜、東洋諸国の大同団結を提唱していた。彼は1898年に東亜同文会を結成、1900年にはこれを国民同盟会へ発展させた。そして対露強硬外交－開戦も辞さずという激論を掲げたこの組織に、多くの政治家や活動家と並んで頭山満と中江兆民が加入しているのである。『三酔人経綸問答』の豪傑君の主張を彷彿させる頭山と平和主義的民権派の代表と思える兆民が、ここに文字通りの同志となったわけである。兆民の同会加入には弟子の幸徳秋水が強く反対したが、兆民は聞かず、むしろ積極的に行動を展開した。

間もなく兆民は喉頭癌に侵されて病床に就き、翌年他界するが、頭山は何度もこれを見舞っている。兆民は日本の行く末を案じ、両眼に涙を浮かべながら頭山の手を握って後事を託したという。

結び

松本健一は『思想としての右翼』の中で、「近代日本のリベラルによる支配体制が確立しようとしたとき、その反体制派たる右翼と左翼がその成立の契機をもったのである・・・右翼と左翼とは、明治国家体制の補完物たることを拒もうとした親から生まれた双子児であった」と述べている。

士族叛乱から自由民権という反体制的政治運動の流れの中で、社会主義と反国家主義の傾向を強める思想潮流は左へ動き、国権の拡張からやがては大陸唱覇へと歩を進める部分は、帝国主義的国策と微妙に交錯しながら右へと旋回していった。

大正～昭和初期になると両翼の変革思想は頂点にまで奔騰し、激しく対立もするようになるが、最過激な分子—象徴的に言うなら、大杉栄（1885－1923）と北一輝（1883－1937）、日本共産党と二・二六事件の青年将校など—は、ともに権力によって圧殺された。左翼は穏健なものと同様によって変節したものが体制に組み入れられ、一方右翼は初志を矯正して国策に追従したものは堂々と新体制の中核を担い、残虐極まるアジア侵略の先兵へと転落していったのである。

参 考 文 献

- 『中江兆民全集』（岩波書店）
- 『現代日本思想体系・アジア主義』（筑摩書房）
- 『日本の思想家1』（朝日新聞社）
- 松本健一『思想としての右翼』（第三文明社）
- 小島直記『無冠の男』（新潮社）
- 田原総一郎『日本の戦争』（小学館）
- 『國士内田良平伝』（原書房）
- 『近代日本政治思想史I』（有斐閣）